

## 2020 年度入学生入学式学長式辞

2020 年度入学生の皆さん、おめでとうございます。一年のうちで最も美しい新緑の、光り輝く季節に、しかも晴天の青空のもとで、本学のシンボルとも言える 100 周年記念館で、皆さんをお迎えして、1 年遅れの入学式を挙げることを私は心より嬉しく思っています。

私は昨年の『大学報』にて、学生の立ち入りを禁止したキャンパスの状況を、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』にある「春がきても鳥の鳴き声が聞こえない沈黙した世界」のような光景だと描きました。たとえ青空の下で櫻と銀杏の若葉が光り輝いていても、学生の姿が見えない、そして声が聞こえないキャンパスは本当に寂しいものでした。

今年はコロナ禍の渦中にありながらも、4 月 1 日に新 1 年生の入学式を実施し、さらに本日、2020 年度に入学された新 2 年生の皆さんをここに迎えることができ、待ちに待った春が大学にもようやくやってきたという思いでいます。皆さんもどうか、この喜びに身を委ね、キャンパスの主人公は自分たちだという思いを新たにしてください。

本学は 1900 年（明治 33 年）開校の大倉商業学校を淵源としています。敗戦の混乱と苦難の時期を乗り越え、昨年創立 120 周年を迎えた堂々たる伝統校です。皆さんはこの伝統ある東京経済大学の学生ですが、本学の建学の精神である「進一層」と「責任と信用」の由来をご存知でしょうか。

「進一層」という言葉の直接的由来は、本学の創設者大倉喜八郎が、大正 12 年夏に新潟県人会の集まりで講演した「進一層」という標題によります。この講演の中で、喜八郎はおおよそ次のように述べました。

私は事をなすにあたって、常に今よりもさらに一層前に進むのだという気概で取り組んできた。とくに、困難に遭遇した時や、難局に処した場合には、とても「退一步」などという消極的な覚悟では、到底難局を突破することは出来ない。そういう場合には、どうしても勇気を奮い起こさなければいけないと思う。「退一步」ではなくて「進一層」である。

もう一つの建学の精神である「信用と責任」は、喜八郎が 92 歳の高齢で亡くなる 3 ヶ月前の大倉商業学校の始業式での「最後の訓話」に由来します。そこで、喜八郎は学生たちを前にして、「およそ何事をなすにも、最も大切なものは信用である。信用のない人間は首のない人間のようなもので、人間としての値打ちもありません」と仕事と人生における信用の大切さを訴えました。

本学にとって、この2つの建学の精神のどちらも重要なことは言うまでもありません。しかし私は、このコロナ禍の最中に大学生活を送ろうとされる皆さんに対し、「進一層」の精神こそを学生生活の導きの糸にさせていただきたいと強く願っています。もっと平たく言えば、社会全体が消極的になりがちな時期だからこそ、皆さんは、より一層積極的な、まさに進取の気性あふれる学生生活を目指していただきたいと願っています。

それでは、積極的な学生生活とはどのような生活でしょうか。私は、皆さんには、次のような学生生活を送ってほしいと願っています。

まずは、自分たちこそキャンパスの主人公であり、東京経済大学の歴史に新しいページを切り開くのだという気概をもっていただきたい。皆さんが教育サービスを受ける立場にいること自体を私は否定しませんが、皆さん自身の主体的努力と知的営為こそが大学教育の質を高め、ひいては他のどの大学よりも「大学らしい大学」を目指してきた東京経済大学の未来をつくっていくのだということを心に刻んでおいていただきたい。このようにマインドを切り換えた上で、今からの3年間、各自が目指す方向についてじっくりと考え、その目標に向かって歩いていっていただきたい。

次に、ゼミへの積極的参加こそが積極的な学生生活を送りうるかどうかの鍵を握っていると私は考えています。従って、まだゼミに所属していない人は3年次にはぜひゼミに参加するよう努めてください。というのは、ゼミこそ「教員と学生の語らいと切磋琢磨の場」であり、ゼミのなかで厳しい訓練を受けることによって、皆さんは卒業後も自発的に、そして能動的に学ぶ力を身につけていくことができるからです。それだけではありません。皆さんは、ひとりの尊敬する教師との個人的な接触・交流を通じて、そしてゼミ生同士の対話を通じて、生涯自分の心の糧となる何かを学んでいくのです。

私はいつも、皆さんの行動力、協調性と柔軟性、忍耐力と責任感を養ううえで課外活動が重要だと言ってまいりました。心身を鍛える体育会系クラブや仲間とともに興味ある分野について打ち込める文化系サークルへの参加を勧めてきました。中には、自分が本当に入りたいと思う部活やサークルが見つからないという人がいるかもしれません。そういう方は、私が今年の「新年の学長メッセージ」の中で紹介した名古屋大学の岩田恵実さんの例を思い出してください。

岩田さんはちょうど1年前に、ツイッター上で「サークル部員募集、一緒に本の感想を呟きましょう」と呼びかけ、その集まった10名ほどの学生と一緒に名古屋大学読書サークルを立ち上げました。オンラインの気軽さをうまく活用して、コロナ禍にも負けず、学生同士の交流の場をつくっていった岩田さんの行動力を私は高く評価しています。このように、

皆さんも必要と感じるならば、自分自身の手で新しい部やサークルを立ち上げ、学生時代にしかできない学生同士の交流を図り、一生付き合えるような親友をつくっていただきたい。

私は昨年の『大学報』のなかで、「コロナ危機は、本来若い人が集い、その集いのなかで互いに切磋琢磨しながら成長していく場である大学にとって大きな危機である。しかし、最悪の経験からも人間は学ぶことができる。」と書きました。今も、この考えに変わりはありません。いや、その確信はますます強くなっています。たとえば、皆さんがコロナ禍でやむを得ず開始したオンラインでの学びについて考えてみてください。今や皆さんの多くはオンラインでの学習にかなり習熟するようになりました。ズームを使って相手の表情を見ながら議論を交わすこともできるようになりました。このように、最初は強いられたかたちでスタートしたのですが、今や皆さんの自主的に学ぶ力、そして他者と交流する力は飛躍的に増大したと私は思っています。

どうか皆さん、「進一層」という言葉を導きの糸として、自分たちがキャンパスの主人公であり、創立 121 周年を迎えた東京経済大学の歴史に新しいページを刻むのだという気概をもって、大いに学問に励み、大いに交流を深めてみてください。私は、今後 3 年間における皆さんのたゆまぬ歩みを学長室から応援しています。

2021 年 4 月 10 日 東京経済大学学長 岡本英男